

コープふくしま 3月11日復興応援デー

従業員一丸となって盛り上げる

震災から一年を迎えた2012年3月11日、コープふくしまのコープマート方木田では、復興祈念タオルの配布が行なわれました。このタオルは、サンネット事業連合の全店で無料配布され、同時に、全国の生協でも東北復興支援を目的に販売されます。

この日、コープふくしまでは、タオルの配布以外にも、組合員に来店してもらうために、「おたのしみレシート番号くじ」、「まる得ポイント5倍サービス」、「優待券持参で来店ポイント20点進呈」など、お得な特典を設けました。

さらに、先月2月11日から、毎月11日を「いきいきコープ復興応援デー」と定め、この日の売り上げの1%を、子育て応援や除染活動のために、地域の市町村へ寄付することに決めています。

コープマート方木田のエントランスでは、原発撤廃や内部ひばくの無料検診などを国へ訴える署名活動も行なわれました。

これらすべての取り組みは、コープふくしまの従業員が一丸となってアイデアを出し合い、それを店長会などでまとめて実現していったものです。

ちょうど一年前の2011年3月11日、福島県は、震度6強の大きな揺れに襲われました。コープマート方木田は、建物自体は無事でしたが、天井のスプリンクラーの配管が壊れ、天井から水が流れ落ち、9台あったレジの内5台は、その水が原因で壊れました。店内の棚が倒れることはなかったものの、半分近くの商品は床に落ち、ビン類などが割れました。

コープマート方木田の店長・河原信彦さんは「震災直後、店内にはガラスが飛散し、余震が続いていました。とにかく全員を外に避難させなければと思いました。会計の途中で急いで避難したのでしょう。1万円札がレジに置き去りになっていました。後で持ち主を探しましたが、結局見つかりませんでした」と語ります。その後、河原さんは店を閉めるように指示し、店内の掃除や片付けをし、全員を閉店時間よりも早く帰宅させたといいます。

「翌日、店の前には数百人の長い列が、店を取り囲むようにできていました。幸い電気は通っており、4台のレジは使えました。また、ガスはプロパンガスのため問題ありません。ただし、水は出なかったため、20km離れた二本松市にあるコープマートあだたらからトラックで運びました。しかし、顧客用のトイレに使用できるほどの水の余裕はなく、トイレは閉鎖されたまま。また、水が出るまでは生鮮食品は扱うことができませんでした」と河原さんは振り返る。



職員の提案による

おたのしみレシート企画も実施された。

一度にたくさんの人を店内に入れて、再び大きな地震が起こると危険であると判断し、入場規制を行ないながらの営業をしばらくの間続け、2週間ほどで店頭行列は解消されたといえます。

「原発で爆発があった後、空間放射線量が20ミリシーベルトと、非常に高い値になり、その後、雨が降りました。情報がなかったとはいえ、組合員さんや従業員を外に立たせてしまったことが悔やまれます」と河原さんは言います。



原発廃止などを訴える署名活動は、
従業員の交替制で実施。

この1年のさまざまな変化

この一年間は、放射線による風評被害との戦いだったともいえます。2011年4月、農産物や牛乳などに出荷規制がかかりました。福島産の農産物は突如として売れなくなり、牛乳の供給は2010年比30%まで落ち込みました。7月には放射線を含んだ稲わらの報道がなされ、牛肉などの商品に出荷規制がかかりました。8月には古米を求める人による米騒動が起こり、10月には一部の新米から基準値以上の放射線が発見されたことから、福島のお米に出荷規制がかかりました。

コープマート方木田の商品構成も、この1年で大きく変化しました。これまで福島ではあまり売れていなかった北海道米が、現在は前年比1000%の売れ行きです。ただし、コーププライスは、放射線量の低い会津が生産地であったため、それほど落ち込みはひどくないといえます。牛乳は、2010年比60%ほどまで回復してきています。

お店にやってくる組合員も、福島産の農産物や生鮮食品を、購入する人としらない人で、大きく二分します。コープふくしまでは、いずれの選択もできる品揃えを心がけています。また、コープおおいたの協力のもと、月2、3回、大分県の野菜を販売しています。

売り場の商品だけでなく、訪れる組合員の顔ぶれも、一年前と大きく変わったといえます。原発周辺に住んでいた方が福島市内に引っ越して来たのと同時に、放射線を恐れて顔なじみの組合員が福島から出ていったためです。コープふくしまでは、全店で使える「ふくしまは負けない避難生活者応援5%割引カード」を発行し、避難生活者をサポート。また、放射能に関する学習会や、除染作業に取り組むなど、福島でくらし続けるための取り組みも積極的に行なってきました。

河原さんは、今の気持ちを次のよう語ってくれました。「放射線や原発は、20年、30年と引きずる問題。今、福島のすべての人は大きな不安を抱えています。だからこそ、ほんの束の間でも不安を忘れ、生活の核となる買い物を楽しんでもらえる場を提供したいと思っています。このままでは、若い人達が出て行く一方の場所になってしまいます。今後、福島の安心をどうやったら築いていけるかを考えていくことが大切です」。福島では、放射線の問題を中心に、未解決の問題が山積みであり、先行きが見えない状態にあります。安心してくらする福島を取り戻すまでには、まだまだ長く険しい道が続いて

います。震災から一年経ったこの日、決してくじけることなく、従業員一丸となり、組合員とともに歩いていく、そんな強い決意を垣間見ることができました。